

同 志 社 大 学

2011 年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2012 年 2 月 2 日提出

所 属	職 名	氏 名
心理学部	教授	中谷内 一也
研 究 題 目	リスクに対する人々の不安：その構造分析と働きかけ方略の検討 (学術振興会科研費・基盤研究(B)21330149 と同じ)	
研 究 成 果 の 概 要	<p>本研究計画の全体的な目的は、さまざまなリスクに対する人々の不安の構造を明らかにし、リスク不安の類型化を行った上で、リスク不安に働きかけるための方略を構築することである。この全体目的の中で本年度は、全国調査を実施し、日本人がどのようなリスクに対してどれくらいの不安を感じているかを質問紙により探った。住民基本台帳を用い、層化二段階無作為抽出により 2,000 サンプルを対象として選び出し、調査への参加を依頼した。質問紙の内容は報告者により先行研究を参照し、食品・医療系の日常的技術領域から「食品添加物」や「薬の副作用」など、突発的災害領域から「鉄道事故」「落雷」など、社会的トピックス領域から「エイズ」「テロ」など、家庭生活上の問題領域から「虐待」「失業」など、大規模環境問題領域から「地球温暖化」「石油の枯渇」など、典型的死因領域から「ガン」「交通事故」など、犯罪から「身体犯」「財産犯」など、合計 51 項目を評価対象とし、不安の程度やリスク管理者に対する信頼などを 6 段階リッカートスケールによって測定した。51 項目の中には地震や原子力発電所の事故といった、東日本大震災に関連の深いハザード項目も含まれている。これらの項目に対する不安が上昇し、リスク管理に対する信頼が低下するのは当然のことであるが、本調査では、他のハザード項目への不安がどう変化したのかにも注目した。具体的には甚大な被害に対する対比効果が起こって他のハザードへの不安は低下するのか、それとも、同化効果によって、自然災害や先端的な科学技術に関連する項目への不安が高まるのか、という問題である。このような観点からの検討はこれまでのリスク認知研究では行われていない。また、そもそも日本人の不安の構造自体がどう変化したのかについても実証的に検討を行った。</p>	